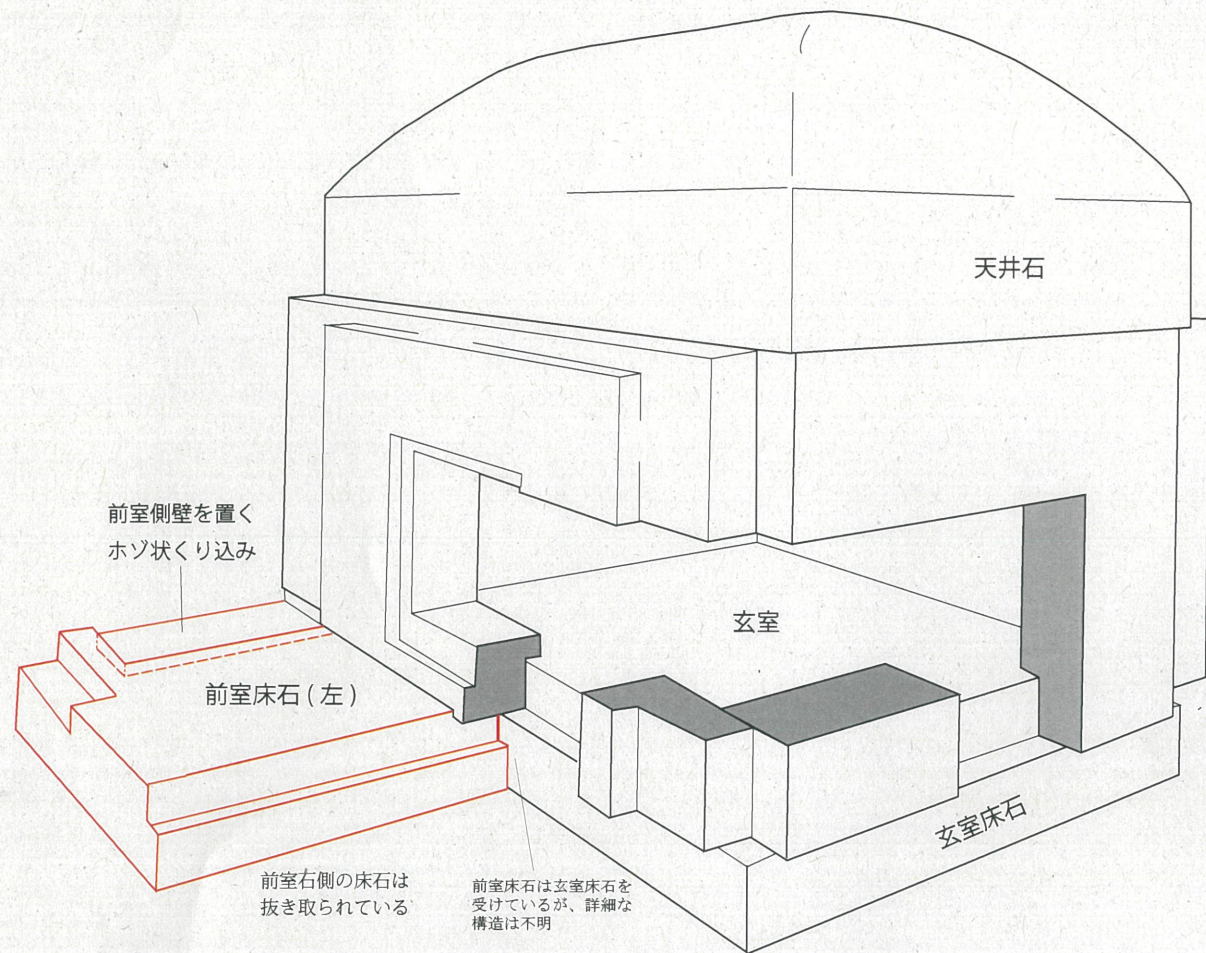


山代原古墳の石室模式図



山代原古墳の埋葬施設

- この古墳の主が埋葬された石造の部屋は「石棺式石室」といわれる出雲東部地域に特徴的な石室です。「家型の石棺」が巨大化した姿になっており、「家」のような造りであることが特徴です。
- 遺体を安置した「玄室」の前に、「前室」という部屋があります。今回の調査で前室の床石(左側)の構造が判明しました。
この前室床石(左)は、石室を構築している多数の石材のなかで一番最初に据え付けられたもので、石室造りの基点となったものであることがわかりました。
- この床石は、上面(床面)のみ露出するものですが、人目に触れない部分にも複雑な構造を持っています。また、厚さは約75cmもある重厚なもので古代の石造技術の高さを示すものです。

出雲東部最後の最高首長墓を発掘調査

やましらはら こふん

～ 山代原古墳の現地説明会～

令和2年6月21日(日)

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

島根県埋蔵文化財調査センターでは、八雲立つ風土記の丘地内において、重要遺跡の保護を目的とした調査を継続して行っています。令和元年度から同2年度まで、松江市山代町にある山代原古墳の発掘調査を行っています。

このたび、古墳の形や規模、石室床石の構造などが明らかになってきたことから、調査成果について現地説明会を開催します。

山代原古墳について

古墳の概要：山代原古墳は、古墳時代後期(6世紀～7世紀前半)に出雲東部の最高首長の墓域であった大庭・山代古墳群に所在します。この古墳群の中では最後(7世紀前半)に築造された最高首長の墓と考えられます。墳丘上部は後世に削られており、形や規模

は不明ですが、埋葬施設の横穴式石室が開口しており、研究者には明治時代から知られ

ていました。石室の形は「石棺式石室」と呼ばれる出雲東部独特の型式で、県内最大級のもので

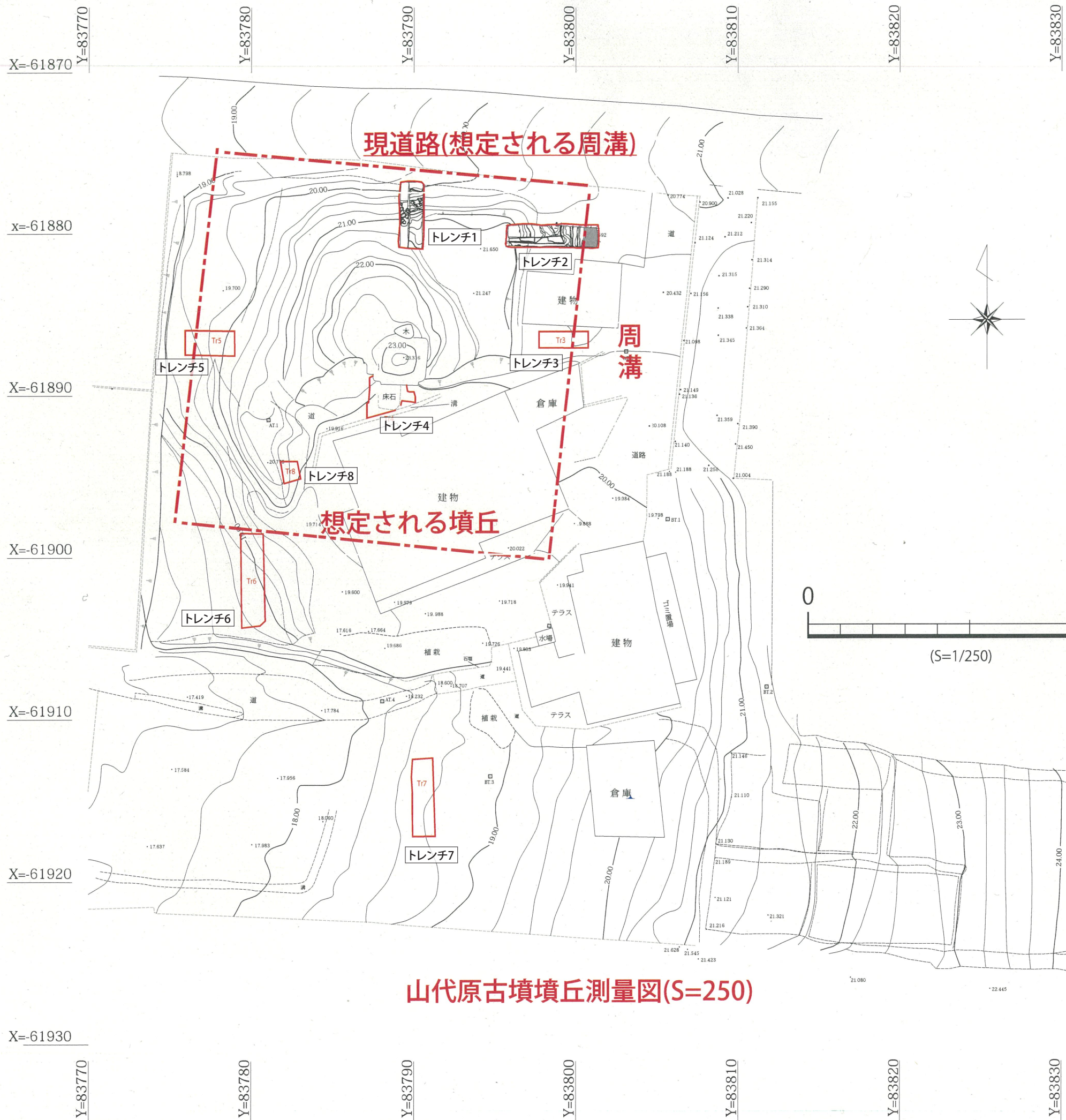
調査期間：令和2年5月11日～6月末

調査成果：

- ・古墳とその周辺の詳細な地形測量を行い、方墳である可能性が高くなりました。
- ・墳丘のトレンチ調査により、古墳の東側・北側にはL字状の溝(周溝)が造られたことがわかりました。
また、古墳の石室に用いられている石材(荒島石)の細片が多く出土しており、当地で石材の仕上げ加工をしたことがわかりました。

調査の意義：

- 山代原古墳は、出雲東部最後の大型古墳として戦前より知られていました。このたび2カ年にわたる発掘調査によって、古墳時代後期から古代にかけての出雲東部の政治的動向を知る上で、貴重な資料を得ることができました。
- これまで不明であった古墳の形や石室に関する貴重な情報を得ることができました。
 - ・周溝の可能性のある溝の発見により、墳丘規模は一辺約23mの方墳である可能性が高くなりました。
 - ・石室石材である荒島石を墳丘の中から発見できたことにより、墳丘と石室の構築方法を知る手がかりを得ました。
 - ・前室床石の周辺を発掘したことにより、これまで知られなかった複雑な構造をもつことがわかり、高度な技術によって造られていたことが明らかになりました。



山代原古墳墳丘測量図(S=250)

3 トレンチ
 墳丘の東端から掘割にかかる部分が見つかりました。
 掘割は、標高の高い古墳の東側と北側に施工され、墳丘範囲の明確化がなされます。掘割から出た土は、古墳の盛土に使われています。

4 トレンチ
 石室(玄室)の前にある前室の床石周辺を掘り下げています。
 前室床石は左右2枚の石材で構成されますが、大正年間に右側の石は引き抜かれており、現存しません。
 左床石と右床石の合わせ目は、木工技術でいう「組継ぎ」状の加工が見られます。また、左側壁を据える「ほぞ継ぎ」状の繰り込みも丁寧に彫りこまれています。
 「石棺式石室」は石と石を複雑に組み合わせて構築されますが、普段は土に埋もれて見ることがない床石の下部まで丁寧な造作がなされていることがわかりました。

5 トレンチ
 墳丘の西端部分が見つかりました。
 墳丘東端よりも1.7mほど標高が低いことから東から西に傾斜する斜面に古墳が造られたことがわかります。

8・6 トレンチ
 6 トレンチでは墳丘南端や周溝は見つかりません。
 8 トレンチでは明瞭な墳丘盛土が確認されていることから、南側墳端は6 Trの直近北側に想定されます。

7 トレンチ
 古墳の南側に東西に広がる堀状の地形が古墳に関連するものか確認する目的で設定しています。古墳時代の人為的な造作や遺物が見られないことから、自然地形と考えられます。